

ジェネラル・バプテスト教会の働き

フェンスタントン記録によると、1650年代、多くの場合、教会における牧会の働きとその職制はまだしっかり整えられたものではなかったらしい。1653年11月に「福音のメッセンジャーとして按手され、選ばれた」ヘンリー・デンでさえも、教会の承認無しにカンタベリーで自由に伝道活動を行えなかった。同じようなことは、ウィリアム・ジェフリーの1659年の筆からも明らかで、その中で彼はエドワード・バーバーの初期の論考に賛意を表している。バーバーによれば、メッセンジャーの役割は「教会に集う人々、またはそれと同等の人々に」説教することであって、その者たちは使徒の後継者であるべきとあった。また、教会の働きにはメッセンジャー、長老（または牧師）、執事という3種類の職が必要であるとも記している。また、教会は牧師の生活を進んで支えるべきであるが、それに対して牧師自身は「謝礼なしで福音を伝えるための最大限の努力」をすべきとされた。ここで明らかなのは、教会の牧師は少なくとも、自分の生活を支える仕事を持つことが求められていたということである。この考え方は、1650年代の草創期のジェネラル・バプテストの間で広く認識されていたと思われる⁴²。

ジョン・デンとエドモンド・マイルというフェンスタントン教会の2人の牧師は協働牧会を行っており、教会ではそのような複数のリーダーシップは普通であった。いつもそうであった訳ではないが、近隣の教会における教会役員（牧師と執事両方）の按手式には揃ってその責任を分担したようである。また、ケンブリッジの牧師会は自らの責任で按手式や特筆すべき事態のために代表者を送ったが、そのようにして派遣された2名の牧師は、クエーカー派に転向した2名の人物を譴責し、「もしその2名が悔い改めないなら、牧師職を取り上げた後、破門する」ために派遣された。当の2名は悔い改めなかったため、結局教会の職を追われ、破門された。フェンスタントン教会には、教会員が説教を行う権利について具体的な決まりがあった。それは、その個人がスキャンダルに陥らないように注意深く適用された。誰もが教会の礼拝以外の集会で語ることは当然許されていたが、教会の公の集会（主日礼拝）では、教会が認めた人物だけが説教を許された。教会から承認された者だけが、巡回伝道者として「個人としての働き」を許された。興味深いことに、ある教会（リーディングのジェネラル・バプテストやサウス・ウェールズのジョン・マイルドのカルビン主義者の教会のような）は、次のような励ましを与える指導者のグループを持っていた。それは、教会で教えることができるのは4名の教師で、「その人たちは、牧師の働きを妨害してはいけない」というものであった。特筆すべきは、たとえその人たちが正式に「神に祈られた」と認められた者たちであっても、執事と牧師という聖書書的な職の任職では、祈りと按手の両方をもって働きに就かせたということである⁴³。

⁴² RCC, 72. ウィリアム・ジェフリー, *op. cit.*, 95-100.

⁴³ RCC, 155-7, 195, 188f, 144-6, 98, 124f, 187, 200.

協力による働きと組織形成

1650年代のジェネラル・バプテストでは互いに協力して諸課題の解決を行なったが、そのあり様はカルヴァン主義バプテストのように整理されたものではなかった。と言っても、それは横の協力が乏しかったからではなく、それに関する現存の資料が不足していることに起因していると思われる。

1650年代、イースト・ミッドランドとその周辺地域において、確かに協力を目的とした会議が存在していた。それが特定の目的のために集まったのか、それとも地方連合の通常のプログラムの一部であったのかははっきりしないが、である。例えば、想像するに、「30教会の信仰とその実践」（1651年）として承認され、最終的に出版されるに至った信仰的立場を採択した集会の背後には、それ以外にも複数の集まりが行われていたと思われる。また、1656年7月2日と3日にスタンフォードで開催された集会では、2名のメッセンジャーがウェスト・カンタリー地域に送り出される伝道者の派遣と任命が行われたであろうし、それ以前のレスターでの集まりでは、按手を巡って対立していたグループの協力が確認または承認され、それ以後、継続的に地方連合の集まりが持たれるようになった。以上の一方の、また両方の集会は、特定の目的のために召集された会議と言えるかもしれない⁴⁴。

同じようにケンブリッジ地域では、1653年から55年にかけて、必要が生じた場合にはそのための協力の計画と協議のためにアーサー・ハインズ宅で集会が開かれたが、そのような臨時の場合だけではなく定期的にも集まった。その最初の会議は、1653年2月1日に行われた「長老（elders）と牧師（brethren）」の「通常の会議」で、そこでは「教会の」夜の食事が終わった後、主の晩餐を行うべきことが「定められた」と記録されている。次の会議は1654年12月8日で、ジョン・ウィルソンの要請で召集され、この時は長老だけが呼び集められた。個々の長老は「混乱を極めた」タックスフィールド教会の献金活動（一匹狼的な牧師アンソニー・グレイがそう決めつけたのだが）に関わっていた。グレイの献金拒否は、彼に対するメルボルン教会からの公けの訴えに発展した。この問題は、1655年2月6日に開かれた会議で取り上げられたが、そこには「複数の教会の長老たち」が出席し、グレイは次回の会議に出席し、自らに向けられた訴えに対して弁明することが求められた。そして、以下が決定された。

よりよい目的達成のため、諸教会の一致と秩序ため、団結を強くするために我々は一致すべきである。（尊敬に値する教会の長老たちは誰でも）我らは、もつとも集まりやすい時と場所に度々共に集まり、顔を合わせるべきである。

4回目の会議は1655年5月3日に開かれ、その席でグレイは自ら弁明を行なったが、否決され、悔い改めを強く求められた。また、キューカ派に転じたリトルポート教会の2名の長老を譴責するため

⁴⁴ *ibid*, 195-8, 204f.

に、ジョン・レイとジョン・タブラムの2名の長老を派遣することも決定された。レイによる使命完遂の報告書では、この会議を「ケンブリッジのキリストの教会の長老と牧師の連合総会」と呼んでいる。5回目の会議は、1655年6月22日に行われた「複数の教会の長老」による会議で、「教会員以外の者との結婚」は教会として認めないことが決定された。長老が集まった最後の会議は、現存する記録によると1655年9月28日で、マイル・デンとジョン・デンがワーボーイズの教会の執事と長老として新たに任命され、その按手を授けられたこと、いかなる教会員も籍を置く教会の忠告と同意を得ないで伝道旅行に赴くべきではないこと、その場合、当該教会員は「自らの活動が正当であることを会衆にわかってもらう」べきこと、そしてそれぞれの教会は会員の教会籍を管理すべきことが定められた⁴⁵。

明らかに、ケンブリッジの会議では長老の支配的な態度が見られ、それら長老は自分の教会でもかなり強い力を振るっていたが、それはこの時期のカルビヴィン主義バプテストの教会の牧師たちよりも強かったようである。

最初の連合会議はケントで開催されたことが知られており、ジョン・グリフィスによれば、それは1652年7月21日にクランブルックで開かれ、ヤルディングの教会で5日間に渡って開催された。そこでの主要な議論は、信仰者が恵みから落ちこぼれる恐れがあるかどうかであった⁴⁶。

しかしながら、その地域に残っている詳細な記録によると、内容は2回の会議で議題となった課題に関するものであったとある。会議は1657年3月10日にチャットハムで、同年1657年5月26-27日にバイデンデンで開かれ、メッセンジャー、長老、牧師によって「議論され、決定された」とある。最初の会議では、教会役員の兵役に断固として反対すべきこと、メッセンジャーの伝道活動は大いに勧められ、その家族の必要は満たされるべきこと、説教の賜物を与えられた「若者」を励ますべきこと、「我々が従うべき初代教会の主の僕の歩みを知るため、週の初めの日に集まるゆえに」週の初めの日は礼拝の日として聖別すべきこと、そしてヘブライ人の手紙6：1以下の6つの根本方針を否定するものは主の晩餐に与ることができないということに合意を見た。その一方か、または両方の会議は特定の目的のために召集されている。その次の会議で主張されたのは、長老の責任の議論であり、以下のように決められた。

長老は週の初めの日（礼拝）に教会の牧会の働きは行えないが、週内の他の日の機会には病人の訪問や道に迷った主の弟子を探し出す働きなどを行う。長老が責任を持って働けるように教会は支えるべきであるが、それによって生活が支えられるだけでなく、例えば行政の支援のようなものが長老たちを助け、それによって長老たちも自らの召命を離れることなしに時期を得たあらゆる機会に働くことができるであろう⁴⁷。

⁴⁵ *ibid.*, 36f, 108f, 126f, 140f, 144, 147, 155f.

⁴⁶ John Griffith, *A Treatise touching falling from Grace*, 1653, Preface "To all the elders and deacons . . . in the country of Kent".

⁴⁷ *TBHS* III, 1912-13, 247-50.

各地から出席した代表者による会議で話し合われた3つの主要な試みは、1654年の護民官政治の準備期間と1660年の王政復古前夜の間に行われたジェネラル・バプテストの会議においてであることが知られている。最初の2度の会議はメッセンジャー、長老、牧師によってロンドンで開催された。1回目と3回目の会議は政治的危機によって開催がひき起こされ、2回目の会議は教会内部の問題によって触発されて開催された。これら3回のすべての会議は、按手を以ってバプテストが完成されると信じ、多数派になっていたジェネラル・バプテストが占めた。4名のメッセンジャーを含む6名の出席者は、3度の会議のすべての決定に署名を行った⁴⁸。

最初の会議の主な議題は「国内の複数の場所からロンドンに駆けつけたバプテスト教会 (Baptized Churches) の代表者」が出席し、「市民の権限にまつわる」コミットメントを公にすることであった。出席者は第五王国 (the Fifth Monarchy) 運動へのいかなる賛同もはっきりと否定し、「現存する権限」に対する彼らの忠誠を主張し、それを明言した。3回目の会議は1660年の3月に開催され、護民官政治の崩壊と、間もなくある形をとって起こることが予想される王政復古を警告した。実際、チャールズ2世は5月29日にロンドンに入城。「簡素な信仰告白、あるいは信仰の表明」 (*Brief Confession or Declaration of Faith*) は、それに署名した者たちだけではなく、「国内の複数の地域とロンドンに住む多くの他の人物」の確信を代表していることを明らかにしている。

⁴⁸MGAI, 1-22.